

# 【ねがいましては】

令和2年2月25日

KYOWA SCHOOL

第352号

「よいこ2 支配的な親」

前々回、ご紹介しました『人生の悲劇は「よいこ」に始まる』加藤諦三著（PHP文庫）ですが、本の帯に書かれている言葉が「親の束縛から抜け出そう」です。

親は束縛しているわけではないのですが、実は子にとっては束縛以外の何物でもなかったということなのでしょうか。

著者の加藤諦三さんは、「私の父は極めて支配的であった」とはっきり書いています。父の支配的な言動に常に応えるため、筆者は弱々しく振る舞っていたそうです。「諦三、守るべき大切なこととは何だ？」と質問され、「一番大切なことは従順です。」と、毎日復唱させられたそうです。あわせて復唱させられた言葉が「豪胆」だそうです。常に強くなければならないという意味だそうです。従順かつ豪胆です。軍隊のようですね。

筆者の父は、あるとき「屋根から飛び降りろ」と命令したことがあったそうです。怖がっていたら嘲笑されたそうです。まるでいじめですね。実はお父様ご自身が非常に臆病な性格だったそうで、その部分を筆者に投影し、非難することで自分の心の葛藤を解決しようとしていたそうです。「どうだ、お前だって怖いだろう・・・。」

つまり、親が子に「勉強しろ」と強制することで、子に勉強したくないよーという感情を抱かせ、ご自分の幼少のころ味わった苦い思い出を重ね合わせ、自らの心の葛藤を解決させようとしているといったようなことです。

我が子を自分の思い通りの姿に成長させたいと願っていらっしゃる方は、ひょっとすると、ご自身の幼少のころ味わった苦い経験を我が子に重ね合わせ、我が子で解決させようとなさっているのかもしれないと、警鐘を鳴らしているように感じました。さて、これをお読みになっている方は、はたしてどうなのでしょう。

つまり、子はもっと賢くなりなさいというメッセージを加藤さんは贈られているのかもしれませんが、中学2年生の国語に「ガイアの知性」という題目があります。人間に操られるイルカ・シャチ・像などが、実は人間の欲求に合わせてあげているのだと言った内容です。しかたないから合わせてあげるよという感じですね。動物たちの完全にトップダウン的解釈ですが、完全に人間心理を動物たちに読み取られている状態です。加藤さんは子どもたちにもっと賢くなれ、と、エールを送っているようです。

もっとも深く学ばねばならないのは、大人なのかもしれません。あえて大人と表現したのは、私もその一員だということ。常に視線は子どもたちと平行・・・。一個人と一個人がともに相手を敬い、励まし励まされ、手を取りながら歩む・・・。その最小単位が「家族」。

一家団欒を囲んで、たわいのない会話に花が咲く・・・。心に壁のない、相手の気分など気にすることもなく、極々自然体の自分がそこにいる・・・。安心感がその場の空気を包み込む・・・。理想体。

子どもたちを見ていて、勉強に自信のない子に共通するものがあります。常に「他」を意識している・・・です。

私のような常に子どもたちを横に見てきたものにとって、この経験は貴重なものだと思います。世のほとんどのお母様方は、子を縦にしか見る事はできません。我が子はこうだ、だから学校の子どもたちもきっとこうに違いない。お子さんが極めて個性的なものの持ち主とはあまり気づかれません。

学校の授業で先生が、「さあ、先生の言ったことが分かった人、手を挙げて・・・。」などと、言われた瞬間、そわそわと周りを見渡してから、そっと遅れて手を挙げる子が多く見られます。そのほとんどが、自分に自信を失っている状態です。「自分のバカがバレたらどうしよう」という恐怖心が支配している状態です。

初めから「お前はね、お母さんの子だから『バカ』に決まってる、でもねバカを悪く思っていないよ、バカは頭のよい子の役に立っているだろう。人の役に立っていることは良いことだよ。でもね、バカだから勉強は分からなくていいなんて誰も言っていないよ。大切なことは、バカはバカなりに精一杯に授業に向かっているかだよ。わからなかったら『分かりません』って、はっきりと聞けるかが大事なんだよ。それを、どうしようどうしようなんて弱気でいたら、それこそお母さんはとてもさみしいね。子どもは元気が一番、先生を困らせるくらいに聞きまくっておいで・・・。」なんて毎日のように言ってくれるお母さん・・・。きっと、恐怖心は出てはこないでしょう。

先ほどのご自分の過去など一切関係のない心境が分かります。これこそ、子に寄り添うこと、じゃあ、ちょっぴり頭が良かったというご経験の持ち主であるお母さんであつたら・・・。「お母さんね、けっこうまぐれ当たりが多くてね、点数だけは良かったの。でもね、サイテーなのよ。だってね、分からないところが出てくるでしょ、そういう時、分からないんだから答えないのが当たり前でしょ、でもね、悪いことをしたのよ、『どれにしようかな、神様の言うとおりに』って、選んだ答えを書いたの、そしたら結構合っていて・・・それが一番今でも恥ずかしくて、そんなお母さんから生まれてきたあなたに『ごめんね』許してね、あなにはできたら正直に生きてもらいたいと思っているわよ。応援しているわ・・・。」

さてさて・・・バカ+正直に歩んでみましょう。